

教員活動状況報告書

提出日：令和6年3月8日

所 属：生命・環境科学部 臨床検査技術学科

氏 名：栗林尚志 職位：教授

役 職：学科長

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

臨床検査技師国家試験に合格できる学力を身に付けさせることが最大の責任であり、最低でも90%以上の合格率となるように取り組んだ。国家試験対策の科目である臨床検査学演習の授業内容を国家試験の出題傾向を鑑みながら、学生が苦手とする分野を繰り返し講義するなど国家試験において最低でも6割は正答できるよう学力が向上するように心がけた。また、卒業研究において4年生大学を卒業した臨床検査技師としてチーム医療の一員として活躍できるよう課題の抽出、解決できる能力、正確に相手に伝えることができるプレゼンテーション能力が醸成できるように努めている。

科目名	学科・専攻	必，選， 自	配当年次	受講者数
キャリア演習	臨床検査技術学科	必修	1	117
基礎化学	臨床検査技術学科	必修	1	117
免疫学Ⅱ	臨床検査技術学科	必修	3	81
免疫学実習	臨床検査技術学科	必修	3	76
臨床免疫学	臨床検査技術学科	必修	3	91
臨床免疫学実習	臨床検査技術学科	必修	3	76
総合臨床検査学Ⅲ	臨床検査技術学科	選択	4	77
総合臨床検査学演習	臨床検査技術学科	選択	4	85
科学者・研究者論	環境保健科学専攻	必修	1	21
生体防御学特論	環境保健科学専攻	必修	1	2

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

国家試験の合格するために、日々の予習・復習を欠かさず、こつこつと努力することが習慣となる学生の育成を目指している。また、4年生の大学を卒業した臨床検査技師として将来的に臨床検査部門で中核をなし、チーム医療の一員として医師に臨床検査データに基づいて積極的に発言できる臨床検査技師の育成を目標としている。また、困難な壁にぶつかった際に踏ん張れない学生が増えていると感じるため、国家試験という最初の大きな壁を乗り越えられるよう努力できる学生を育てたいと思っている。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

昨年と同様に 3 年次に配当されている臨床免疫学は、国家試験の出題傾向を鑑みて講義内容を行っている。4 年次に配当されている総合臨床検査学演習の講義において国家試験で出題される傾向が高い項目のうち、臨床免疫学で理解できていない、不足している項目を繰り返し講義するようにしている。また、臨床免疫学では、小テストの回数を 2 回に増やし実施し、定期試験前に慌てて勉強することのないよう普段からの復習を促すように指導した。しかし、小テストの点数が芳しくない学生も多く、最低でも復習を促す更なる方策が必要であると感じている。卒業論文の指導においては、4 年次までに課題を抽出し、実験結果を正確に纏め分析し、自分自身で課題を見つけ、解決策を考えられるように指導している。しかし、以前として教員からの指示を待っている姿勢の学生が多く、ゼミ形式以外にも積極的に学生と議論する時間を多くする必要がある。

アクティブラーニングについての取組

臨床検査技術学科として前期配当の総合臨床検査学Ⅲの試験を実践により実施した。今後、担当科目について過去に総合臨床検査学で作成した問題を取り入れるような取り組みをしたいと考えている。

ICT の教育への活用

活用できていない。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

- ①教育（授業，実習）の創意工夫（B）
- ②学生の理解度の把握（B）
- ③学生の自学自習を促すための工夫（C）
- ④学生とのコミュニケーション（質問への対応等）（A）
- ⑤双方向授業への工夫（C）

昨年度と同様に ipad をセカンドモニターとして使用し、講義前に學理へ掲示した講義資料に追加の説明を書き込みながら講義を行った。さらに、この書き込んだ資料と共に録画を學理に掲示し復習に利用してもらうことを期待したが、講義後の閲覧履歴を確認する限り、復習している学生数が少ない。今後、テストではないが google form 等を利用して振り返りの確認テストのようなものを実施する必要がある。理解できない項目を放置したままにしないで講義終了後の早い段階で理解するように継続的に復習する習慣を身に付けるように改善していきたい。

- ⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V 学科，M 学科の教員の方のみ記載してください。）

総合臨床検査学演習では、昨年度と同じく国家試験形式の 5 択問題を解答させた後に、

それらの問題を解説する方式で講義を行った。また、ipad をセカンドモニターとして使用し、各問題の解説を追記すると共に、教科書のどこを見て勉強すればよいか、その問題に関連した事項を連想し幅広く勉強できるよう解説した。この方式は、幅広く勉強できるという学生がいる一方で、講義についていくのが大変という学生が増える傾向にあると感じる。そのため、本年度からここ数年で出題される傾向の高い項目は必ず入れながら講義 1 回当たりの問題数を少なくして講義を行い、理解度が高まるように努めた。さらに、総合臨床検査学演習の試験成績が不振の学生に居残り学習を課し、集中的に勉強する時間帯を設ける共に、補習授業を行い成績の底上げを図った。

5. 学生授業評価（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

ここ数年の国家試験で出題数が多い傾向にある輸血に関する講義が理解し難かったとの意見が毎年あるため、輸血に関する講義に割く時間を多くして理解できる改善に努めた。

②①の結果はどうでしたか。

臨床免疫学定期試験において輸血に関する部分の正答率は高くなった。しかし、総合臨床検査学演習終了後、この項目について質問に来る学生が多くいたことから、学生の苦手意識を取り除く講義内容に改善が必要と考えられる。

③②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。

ここ数年の国家試験では輸血に関する出題の割合が多い傾向がある。しかし、他の項目を削ることもできないので、時間配分を考慮すると共に講義資料以外に追加資料を多くする、補習授業を活用するなどの工夫を行う。

6. 学生の学修成果

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

勉強する方法が分からないという学生がいる。さらに、国家試験に関する問題集に記載されている数行の解説のみを勉強するため絶対的に知識が不足している傾向がある。そのために、講義では国家試験形式の問題を解答させ、教科書、参考書のどこに記載され、関連している項目についても解説している。今後、低学年の時点から勉強方法の改善を促す必要があると考えている。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

学生の評価が、理解し易かった、理解し難かったと二極化していた。

7. 指導力向上のための取組（FD研究会参加状況）（分量の目安：1～2行（40字～80字））

昨年に比べ多くの研究会に参加した。参加できなかった場合には、必ず配信されている録画を視聴した。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

国家試験の合格率が最低でも 90%以上を継続できることが目標である。4 年生大学の臨床検査技師養成施設として、卒業研究の指導においてディスカッションする機会を増やし自分達の言葉で実験の進捗状況を発表させ問題点の抽出、解決策の構築ができるように指導し、高い課題解決能力、プレゼンテーション能力を卒業時までには修得させたいと考えている。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

※資料については非公開扱いのものもありますので、資料名のみを記載してください。

参考

※ ティーチング・ポートフォリオにおける自己記述を裏付けるエビデンス例

(「実践ティーチング・ポートフォリオ スタータブック」(大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会 編)から引用)

(自ら作成するもの)

1. 授業に関するもの

シラバス, 小テスト, 宿題, レポート課題, 試験問題, 教材(配布資料, パワーポイント資料など)

2. 教育改善に関するもの

(教育に直接貢献する研究, FD プログラムなどへの参加記録, 教育の工夫を示すもの(複数年のシラバス等), 教育活動関連の補助金の獲得)

(他者から提供されるもの)

1. 学生から

授業評価データ, 授業に関するコメント(授業評価の自由記述やメールのやりとり等), 卒業生から授業や教育についてのコメント

2. 同僚から

授業参観の講評, 作成教材についての意見, 同僚のサポート実績

3. 大学/学会等から

教育に関する表彰, 教育手法等に関する講演の記録及び招聘の要請書類, カリキュラムやコースの設計などについての評価

(教育/学習の成果)

授業科目受講前と受講後の試験成績の変化, 学生の小論文・報告書, 学生のレポートの「優秀」「平均的」「平均以下」の例, 特に優秀な学生についての記録, 指導学生の学会発表などの成果, 学生の進路選択への影響についての事実, 学生のレポートの改善の軌跡